

萩

Vol 1

ものがたり

笠山椿群生林ガイドマップ収録

吉松
茂

萩の椿



H6
M

シリーズ

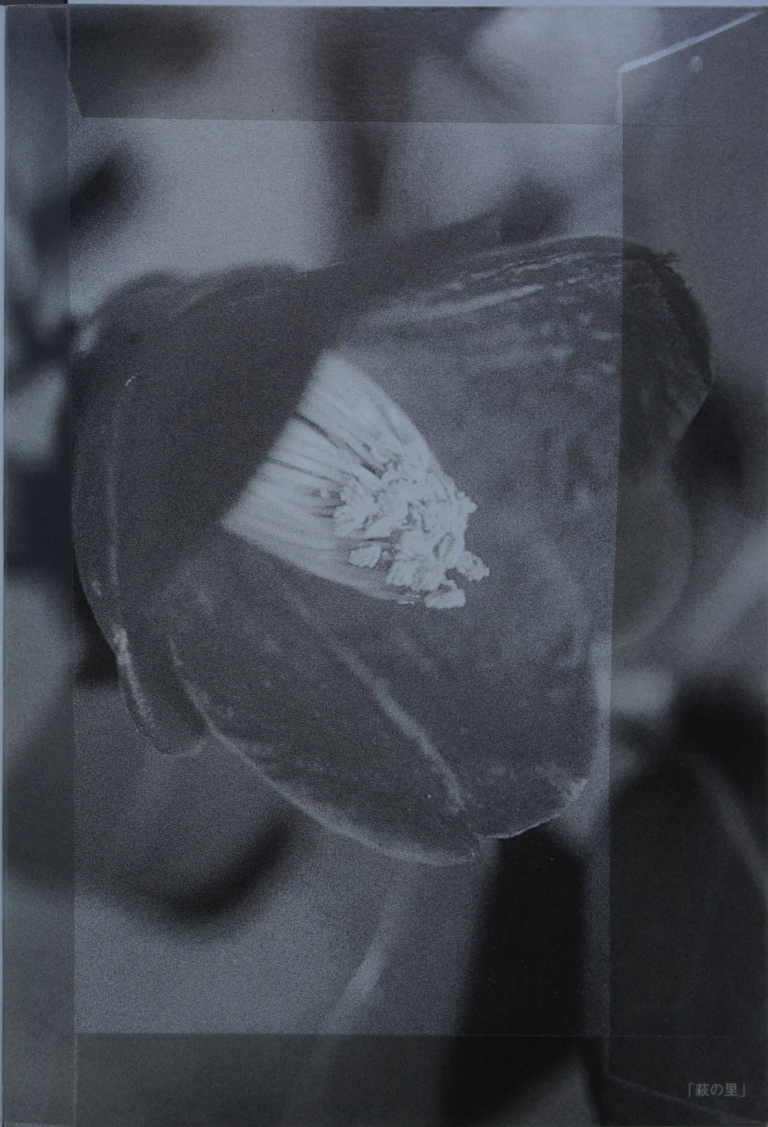
萩

ものがたり ①

萩の椿

笠山椿群生林
ガイドマップ収録

吉松
茂



「萩の里」

目次

一	萩と椿	9
二	笠山 <small>かさやま</small>	11
三	笠山の歴史	12
四	笠山の椿	14
(1)	虎ヶ崎 <small>とらがさき</small> のヤブ椿	14
(2)	笠山の「大ヤブ」	16
(3)	萩小町 <small>はぎこまち</small> の由来	19
(4)	花卉に細毛のヤブ椿「白毛紅」 <small>はくもこう</small>	21
(5)	幻のリンゴ椿	23
(6)	ヒイラギ葉椿	26
(7)	佐助 <small>さすけ</small> と笠山ヤブ椿	28
五	神社・仏閣と椿	29
六	唐椿 <small>からつばき</small> キヤブテン・ローの由来	33
七	薩長同盟記念の木 キヤブテン・ロー	37
八	狐島 <small>きつしま</small> の佐助椿「ビメアカリ」	43
九	椿瀬 <small>つばせ</small> の散り椿	50
十	萩のサザンカ	52
(1)	元禄時代の園芸種 三段花 <small>さんだんか</small>	52
(2)	サザンカの自生北限地 指月山 <small>しづきやま</small>	54



▲日本海と椿

2万5千本もの椿が群生する笠山虎ヶ崎は、日本海に突き出した半島の先端に位置する。椿の小径をぬけると眼下に日本海の荒海が広がる。



▲萩小町
椿林の奥深く、ひっそりと咲き続ける「ハギコマチ」小輪のこの花は、数ある笠山椿の中でも優品の部類に入る。



▲深草少将
全体に整った感じの小輪の優秀花。いつまで見ても見飽きない椿、と評価する人もいる。



◀白覆輪花「指月山」

指月山への登山道には椿の落花がたくさん見られ、その落花の中から枝がわりで生じた淡紅色白覆輪の可憐な花を探し出すことができた。



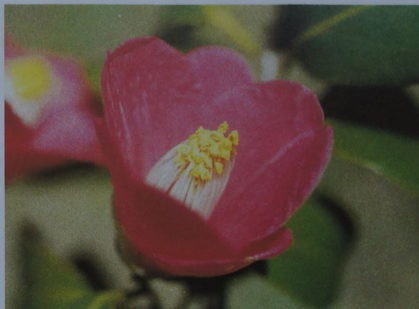
▲キャプテン・ロー

大照院に近い農家の庭先に、一本の唐椿の古木がある。目にしみるような濃赤色の半八重咲の巨大な花が咲く。萩では珍しい唐椿のキャプテン・ローと言われている。



◀白毛紅

花卉一面に細い白毛が生え、このため遠くから見ると濃赤色の花卉が白味を帯びて薄紅に見える。



▲エビ池の「大ヤブ」

別名「萩の里」、花卉は濃赤色、先細り芯の良く整った花である。



▲エビ池

エビ池は笠山にある多くの池と同じ塩水池で、シバナやウラギクなどの好塩性の植物が生育している。この椿は、多少塩分の多い土地でも大きく育ち、立派な花を咲かせている。

笠山案内図

明神池から椿群生林まで

— 遊歩道 1.9km
— 車道 3km

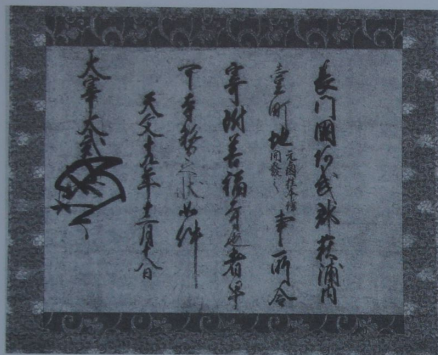
笠山山頂から椿群生林まで

●●● 遊歩道 1.4km



笠山椿群生林 つばきマップ





大内義隆寄進状 (善福寺文書)
萩の地名が最初に現れる文書 天文19年 (1550)

一 萩と椿

萩の地名の由来については、ツバキの「ツ」がなくなつてハギになつたという説がある。

平安時代の「延喜式」(流布本)によると、萩市に關係ある郷としては、阿武、椿木、作美、三島がある。この中に登場する「椿木」は、阿武川口の椿東、椿西を中心に川上、明木、佐々並、福川を郷域とする一帯で、「阿武」の中心の大井と並ぶ古代萩地方の中核的地域であつた。

「椿木」という名の由来については、現在の椿地区にあつた大椿山敏喜寺の縁起に「昔この地に毎夜光を放つ椿の大木があり、そのため椿という地名にした」と記されている。また、一説にはこの地に萩があつて、津牧と称したのが椿になつた

「萩の椿」を楽しむ

春になると萩市笠山虎ヶ崎で椿まつりが始まる。

近年になつて、萩市内や山口県内だけでなく、広く全国から多くの観光客が訪れるようになってきた笠山の椿林だが、ほんの三十数年前までは、ただツツカズラの生い茂る雑木林に過ぎなかつた。たまたま椿の名木や原生林の調査のために全国を巡つていた渡邊武博士が昭和四十五年(一九七〇)萩を訪れ、その助言で開発したのがきっかけである。

笠山のヤブ椿は、花の色、形、雄しべの筒の形など、他の地方と異なる多くの特性を持っている。なかでも雄しべの筒の先端の閉じた先細り芯は、山口県北西部から島根半島にかけては所々で見ることができ、他では滅多に見られない花である。

また、市内で見られる園芸種の椿の古木にはそれぞれ物語があり、萩の歴史と深い関わりのある椿もある。萩市椿青海にある唐椿の大木は、長州藩の軍艦に乗つていた武士が持ち帰つたとの言い伝えがあり、また椎原の毛利家菩提寺・東光寺の墓所にある京椿「日光」は「宮さま椿」とも呼ばれていることから、この名は何か歴史につながりがあるようにも思われる。

この本が、萩の椿探訪のひとつの手がかりになることを願つてやまないものである。

とも伝えられている。

萩と椿の関わりの深さを裏付ける事柄のひとつに、嘉永五年（一八五二）大井の光明寺山から出土した銅製の経筒の発見が挙げられる。経筒に残されていた刻銘によると、鑄造者は雀部重吉、願主は天台僧・惟超、施主は椿武則。つまり、天台僧の惟超が埋経の願主となり、経筒の銅の材料を椿武則が提供し、雀部重吉が経筒を鑄造したということが分かる。このことから、今から九百年も昔、地域名の「椿」を姓とした豪族が萩地方に存在し、「椿」の地名が古くからあったと証明されたのだ。

萩という地名は、防長二州を治めていた大内義隆が天文十九年（一五五〇）に指月山麓にあつた善福寺に与えた「萩浦に開発した田地一町を安堵する」という文書で最初に見られる。萩浦は、椿浦から転じたものとも考えられる。

江戸時代には萩の周辺部は椿郷村と呼ばれ、明治になってからは、阿武川の東の地域を椿郷東分村、西の地域を椿郷西分村と呼んだ。そして、明治四十三年（一九一〇）に椿郷西分村は椿村と改称、大正十年（一九二二）に椿郷東分村は椿東村と改称した。

椿の字を使った地名は、このようにして長い間、萩の地に生き続けてきた。日本全国にある椿に関する地名を調べてみると、青森県から熊本県にわたる三十三都府県に十六ヶ所あり、それぞれの土地で、その名称の由来をもっている。

萩市で現在も使われている「椿」に関係ある地名としては、萩の三角州の周囲を流れる阿武川の東側の地区の椿東、川の西側の椿、椿町、椿谷などがある。これらはどれも平安時代の郷名「椿木郷」を起源としていたと推測できる。

さらに、市内には椿地区に古くからある椿八幡宮や、江戸時代初期に創建された毛利家菩提寺の霊椿山大照院、永椿山長蔵寺、明治初年に開校された椿東地区の椿東小学校、椿地区の椿西小学校など、地区名の「椿」を冠した神社、寺院、学校も多い。

こういった名称から、その土地に住んでいる萩の人々の生活と椿とは、極めて深いつながりがあることが分かる。

二 笠山

阿武川の三角州にある萩市街の北東約四キロメートルに笠山がある。この山は山麓に連なる越ヶ浜の砂洲で本土とつながり、陸繋島になっている。東西約一・三キロメートル、南北約二・一キロメートル、標高百十二メートルの小火山で溶岩台地の上に更に鐘状の噴石丘が重なり、頂上には噴火口がある。萩市街から遠望すれば、その山容が昔の婦人が外出のとき



明神池と巖島神社

巖島神社を建立するなど開発につとめた。その結果、漁業部落が発達し、また港町としても発展していった。

藩政時代には、笠山が萩城の北東、いわゆる鬼門の方角にあたるので、毛利藩ではこの山の樹木の伐採や鳥獣の捕獲を禁止し、また「難を去る」という語呂合せで、さる（猿）を放し飼いにしたという。そのため頂上付近の草刈場を除いた麓の部分は原生林の様相を呈していた。

明治以後はその禁止もなくなり、民有地になった笠山の樹木はしだいに伐り倒され、次々と開墾されていった。

また明治年間には牛の放牧が行われ、大正年間には当時の笠山の所有者・都野豊之進氏が相当大規模に乳牛を飼い、搾乳したこともある。現在でも、山中に放牧した際に牛を出さないようにと囲

三 笠山の歴史

笠山の麓の越ヶ浜地域は江戸時代の初期までは人家はほとんどなかったといわれている。一六七七年ごろ、当時の代官が荒地を開き、民家をここに移し、また明神池のほとりなどに使用した市女笠に似ているので笠山という名称がついたと伝えられている。

笠山は全山溶岩塊が累積し、その間隙に空気や雨水が入って、山の所々で冷涼な気象を作り、土地の人はこれを風穴と呼んでいる。また俗に「四十八池」と呼ばれている窪地が山中いたるところにあり、雨期には池になり、また海水が溶岩の隙間から入り込んで四季を通じて塩水池の箇所もある。これらの池の中で一番大きな明神池には、多数の海水魚が泳ぎ、潮の干満もある。明神池は大池、中の池、奥の池の三つの池が連なり、それぞれの池の塩分の濃度は異なっている。



笠山（市女笠のような）

昭和四十五年（一九七〇）、全国の椿の巨木、名木、原生林などの調査を続けていた渡邊武葉学博士が萩市の調査に來られた。虎ヶ崎の椿の自生

一人いなかった。
いたる所に雑木の間にヤブ椿の自生があり、周囲の雑木を伐り除けば、虎ヶ崎と同じような椿の群生林になり得る所が幾つかある。虎ヶ崎の椿群生林では、明治、大正、昭和と地域の人々の薪炭用に伐られた雑木や椿の切り株から、また新しい芽が伸び、緑の木々の間に赤い椿の花が散見される状態が昭和四十年代まで続いていた。この時代、椿の花の活用を考える人は、誰一人いなかった。



椿林を抜けると、眼下に日本海が開ける

四 笠山の椿

(1) 虎ヶ崎のヤブ椿

赤い椿の花と青い海。笠山虎ヶ崎を訪れる人々の心に残る風景がここにある。眼前に迫る大島の遙か北方に相島や樫島などのアスピーデ型の溶岩台地の島々が海上遙か

った石垣が、所々に残っているのが見られる。

昭和初期に都野氏はその大部分の土地を越ヶ浜の人々に分譲し、大いに開墾を奨励した。

この開墾は漁業が中心であった当時の越ヶ浜の人々の経済を大いに助けたが、反面、笠山の原生林は切り倒されて、その姿を消していった。

また戦後には、笠山の採石事業が盛んになり、多量の石材を切り出したことで山容は一変した。石材を切り出した後の廃土で谷を埋めたため、谷間にあったシダの群落の中には全滅したものもあったという。

現在では採石事業は禁止されている。

いる。この椿は遊歩道から見える位置にあるが、道からすこし離れているので、案内者なしに探し出すことは、ちょっと困難かもしれない。

時間があれば椿林の中に入って、たくさん落ちていた花を見て、好みの花をさがすのもまた楽しいものである。このような落花をさがす方法で、この大ヤブも見出された。

この「大ヤブ」の周囲にある椿もまた大輪が多い。花弁はどの椿も濃赤色だが、雄しべの筒は白色や薄紅を帯びたものなど、いろいろなタイプのものがある。

「大ヤブ」は椿展に毎回出品し、椿会会員や同好者にさし木用の穂木を配っているので、この椿を栽培している人は多い。他のヤブ椿と比べて勝るとも劣らない大輪花である。

この花と同じような大輪の花がエビ池の岸边に



エビ池「大ヤブ」、別名「萩の里」。11月から開花する。

地を訪れた渡邊氏は、この地の雑木ヤツタカズラを取り払えば、椿林として立派な観光地になることを市の関係者に助言された。

それ以来、椿林の道路の拡張整備、雑木ヤツタカズラの除去作業が年々続けられ、椿林は歳月と共に枝や葉を繁らせ、現在見られるような見事な椿林ができあがった。

虎ヶ崎のヤブ椿は、花弁の色も濃赤色、赤紫色、淡紅色など多くの色があり、花の大きさも大輪、中輪、小輪あり、また猪口咲き、筒咲き、ラッパ咲きなど、花の咲き方についても、いろいろのタイプが見られる。雄しべの筒の色も、赤、純白などがあり、筒芯、先端のくっついた先細り芯など多彩である。また葉のかたちも鋸歯の深く切れこんだヒイラギ葉椿と名づけたものもある。

毎年春の椿展には、鉢物の陳列とともにヤブ椿の切り花コーナーを設け、市内にあるいろいろなヤブ椿と一緒に、笠山虎ヶ崎のヤブ椿も展示している。

(2) 笠山の「大ヤブ」

椿展のたびに「大ヤブ」と名づけて出品する椿がある。この花は笠山のヤブ椿の中で一番大輪の花といわれている。花弁は濃赤色で、雄しべは純白の筒芯、花のかたちもよく整って

いつの椿展であったか、笠山のヤブ椿の切り花「ハギコマチ」を花瓶に挿して、名称をかいたラベルを置いていたら、「かまほこのような名前の椿だね」と話しながら見ていた婦人がいた。そう言えば萩小町と名づけられたかまほこが、当市で売られていることに気がついた。この「ハギコマチ」の由来は、三十数年前、この可憐なピンクの切り花を椿展に出品して、一般からこの花の名称を募り、「ハギコマチ」が一番多かったため、この名前にした。椿の花の時期に海岸添いの遊歩道を歩くと、所々にピンク色の花が見られるが、これらはいずれも中輪で、小輪の花は見当らない。

椿林の奥深く、この「ハギコマチ」は、ひっそりと咲き続けている。小輪のこの花は、雄しべの筒は純白色で猪口咲き、数ある笠山椿の中でも優品の部類に入る。

この椿は、積み重なった溶岩の間に深く根を張った六メートル位の樹で、すぐ側にも枝を重ね合わせるように同じ大きさの樹がある。この椿もピンクの小輪花である。

三十数年前までは、笠山の椿で名前がついていたのは、この椿ただ一つであったので、一般の人達には、笠山で最もよい椿のように思われていたが、花の好みは人それぞれに違うので、ピンクの花より濃赤色の花を好む人もいる。この「ハギコマチ」は毎年椿展のとき、さ

(3) 萩小町の由来



塩水池エビ池 好塩性植物が岸辺に育ち、その側に椿が生えている

ある。エビ池は笠山にある多くの池と同じような塩水池で、池の岸辺には好塩性の植物シバナやウラギクなどが生育している。

この椿は、少しぐらいの塩分がある土地でも大きく育ち、立派な花を咲かせている。濃赤色の花弁、純白色の雄しべの筒、先細り芯、十一月ごろから花が見られる。

主婦の友社刊行の「ツバキ十二月」という本を見る機会があった。この本の表紙に「萩の里」と名づけたヤブ椿の写真が載っているが、エビ池の椿は、この花によく似ている。

池の側の椿は、この樹ただ一本だけだから、エビ池に行けばすぐに見つけることができる。この池は、虎ヶ崎椿群生林の遊歩道から離れているので、観光客の目にはあまりふれない。椿展などで、この花の良さをたくさんの人達にも認めてもらいたいと思っている。

笠山の椿群生林の遊歩道を、海側から頂上に向かってしばらく登って行くと、坂道の中ほどにかなり大きい一本の椿がある。この椿は毎年椿展をひらくたびに、笠山の椿の中でも特殊なタイプの花として、切り花を出品している。

「椿展には、花びらに毛の生えた椿が出ていましたが、笠山には随分珍しい椿がありますね」などと、椿展を見に来た人に話しかけられる。見る人の注意をひく花である。花は中輪

(4) 花卉に細毛のヤブ椿「白毛紅」

ので、むかし「小野小町」のもとに、九十九夜通い続けたと言う「深草少将」の名をとって、二十数年前の椿展から、この名称で展示している。

「随分かわった名前の椿ですね」という人もあるが、優秀なヤブ椿に名称をつけて、花をたくさんの人に知ってもらいたいと思っている。

笠山のヤブ椿の美しさを知る人は、萩の人より、むしろ他の都市から訪れる観光客の方が多い。地元の人達は、笠山の景色やヤブ椿を常に見慣れているためか、ここの椿の良さがわからない。他の人に指摘されて「なるほど!」「そう言われれば」などといって、そのヤブ椿の優れた点を、あらためて見直すのが、大多数の人達である。



「ハギコマチ」の樹の近くには小輪花が多い

し木苗を同好者や会員に配ったり、穂木をつぎ木講習会に使ったりしたので、この椿を栽培している人は市内には多い。

「ハギコマチ」のすぐ側に、花の形は同じ小輪で、濃赤色の椿がある。先年、物故された著名なヤブ椿の研究者・宮沢基治先生が、かつて笠山を訪れ、この花を見て激賞されたと聞く。全体に整った感じの小輪の優秀花である。「いつまで見ても、見飽かない椿ですね」といって、評価する人もいる。

この椿は、毎年切り花で椿展に出品していたが、「ハギコマチ」の隣の樹とか、笠山四号とか言う呼び方で、名前はなかった。しかしこれでは、椿展などに出品するとき不便なので、「深草少将」という名前をつけた。

そのわけは、萩小町と隣り合わせに並んだ樹な

には、結実しないものもないではない。笠山の椿を一本々々調べてはいないので、このようなタイプの椿は他にはないとは言いきれないが、笠山の椿の中で結実しないものは非常に数が少ないだろう。

この椿の花を調べてみると、雌しべも雄しべも完全にそろっているように見えるが、結実しないのは何か他の理由があるのではないだろうか。

(5) 幻のリング椿

昭和五十八年（一九八三）二月ごろであったか、NHKラジオ放送「朝のロータリー」の番組で、笠山の椿の話をしてくれとの依頼があったので、笠山の椿の概略を話した。そのとき笠山にある大きい実のなるリング椿に話が及び、「十センチに近いような大きな椿の実が赤色を帯びて、たくさんぶらさがっている光景はすばらしい」という意味のことを放送した。

その日の夕方、九州の方から早速電話があつて、直径十センチもあるような実のなる椿があるなら、苗を送ってもらいたいとのことであつた。苗は育てていないこととお話してお断りしたが、直径十センチに近いとはちょっと幻のリング椿の感がしないでもない。

この電話を受けて以来、笠山のリング椿の一つひとつの実の直径を実際に測って大きさを

で、他の花と比べて優れているとは言えないが、この枝をさし木してみると、苗の伸び方は他に比べて早く、枝打ちはやや荒い感じであり、葉は大形の部類に入る。花は最初のうちは抱え咲きに咲くことが多いが、他の花と違う点は花弁一面に細かい白毛が生え、このため遠くから見ると濃赤色の花弁が白味を帯びて薄紅に見える。椿のある場所には、同じような中輪の花が咲いているので、注意して花を探さないと、見落し易い。

この椿は春になるとたくさんの花をつけるが、夏にこの椿の側を通ってみると、実は一個も見当らない。椿群生林をひらき、観察し易い状態になって既に三十数年を経過しているが、誰一人実を見かけたものはないという。

椿には佗助（たすけ）の仲間のように雄しべが退化して、花は咲くが結実しにくいものや、また園芸種の中



「白毛紅」花弁の裏に短い白毛が密生する特異なタイプ



大実椿 直径8.5cm
(1994年8月21日採集)



大実椿の花

察会を行った際、偶然直径八・五センチの大実椿を採集した。この大きさであれば屋久島のリング椿に匹敵する大きさではないかと思う。大きい実がたくさんぶらさがっている光景はやはり素晴らしい眺めであった。元来リング椿と呼ばれる椿は、九州の屋久島の山中にある実の大きい椿で、花は小輪、実の直径は八センチにも及ぶという。先日、種苗会社から送ってきたカタログを見ていたら、屋久島のリング椿の苗を販売していた。大きな実の椿を眺めて楽しむ人も、やはりあるものと思い、改めて笠山の椿を見直した。

屋久島のリング椿と笠山のリング椿は、厳密に言えば同じものではないようだが、このように実の大きい系統の椿は、九州を北上して笠山まで及んでいるという。

対馬暖流に運ばれて、遠い九州の果てから椿の

調べることを思いついた。

夏になって、椿の実の大きくなるころを見はからって笠山の椿林に行き、リング椿の実の大きいものを選んで、その直径を測ってみた。その結果、直径六センチ程度が普通であり、中には七センチ位のものもあったが、幻の十センチに近いものは、このたびの調査では発見できなかった。

遊歩道南側の椿林には、多くの大実の椿が見られるから、丁寧に探せば、もっと大きい実が見つかるに違いないと淡い希望をもったが、当時は真夏のことで、椿林の中は雑草が一面に生い茂り、遊歩道には到るところに蜘蛛が巣を張りめぐらし、椿林の中に入れる状態ではなかった。またの機会にと思いながら、とうとうその年は調査時期を逸してしまった。

しかし、平成六年（一九九四）に笠山で植物観



大実椿 果肉が普通種より厚い



ヒイラギ葉椿 ヤブ椿の突然変異、葉の幅が狭い

葉よりやや幅狭く細長い形である。花は小輪でなく中輪で、特に優れた品種とはいえない。しかし、葉が普通の椿と違うタイプなので、見る人々の記憶には残る椿である。

このヒイラギ葉椿は、中央遊歩道から少し離れているので、遊歩道からは見えないが、椿林の中に二、三十メートル入ると見つけることができる。樹勢は旺盛で枝張りもよく、樹容は見事である。遊歩道沿いになれば、きつと観光客の眼をひく椿になるのだが、一般の人の目につきにくい位置にあることは惜しまれる。

このヒイラギ葉椿より葉の幅が一層狭く、鋸歯の切れ込みの深い葉のヒイラギ葉椿が、遊歩道の三叉路の近くにある。溶岩の間に根を張った樹高二メートルばかりの小さい樹だが、大樹の下に生えているためか、この椿の花を見たものは、二十

実がはるばる笠山まで流れついた、と想像してみることも夢があり面白いのではないか。笠山のリング椿は、リング椿系の大実椿ということになるかも知れない。この椿は実の大きさもいろいろあり、ヤブ椿との中間種のような大きさの実も見られる。花はヤブ椿と変らない。実は大きいのが中の種子の大きさはヤブ椿と大差はない。大実椿は、萩市周辺では所々で見ることができると言える。実の大きさを一つ一つ調べれば、大実椿の地域別の傾向が分かるのではないだろうか。機会があれば調査してみたいものである。

(6) ヒイラギ葉椿

葉がヒイラギの葉のように切れ込みの深いヒイラギ葉椿は、既に江戸時代から園芸種の葉変わり椿として知られていた。その古典的椿の特徴は、元文四年（一七三九）に書かれた「本草花時絵」によると、「花形壺咲、小輪本紅の無地なり、葉の形、枝のごとくにまわり、鋸の歯のごとくなる大ざざ（？）ありて、ほそ長くしげり付く、花の時、生花に入れて至極よし」と述べている。

毎年椿展に出品している笠山のヒイラギ葉椿は、このような園芸種ではなく、野生のヤブ椿の葉の変化したもので、葉のふちが鋸の歯のようになり切れ込みが深く、形は普通の椿の

数年間誰もいない。毎年、今年こそはと期待して
蕾を探すのだが、いつも失望の繰り返しである。

(7) 佗助と笠山ヤブ椿

笠山の椿が佗助のような花で埋まったら、どんなにすばらしい眺めになるだろうと言った人がいたが、佗助タイプの小輪猪口咲の花も、笠山の椿林の中に見ることができるとは、

花が小輪だからよいのではなくて、花の色や形なども優れていることが優秀花の条件である。各人各様の好みもあるのが一概には言えないが、たくさんの人に好まれる花が、よい花と言えるのではないだろうか。

小輪の濃赤色の花は、中央遊歩道の坂道を登ったところにある。ここの数本のヤブ椿は、小輪、



笠山小輪椿 佗助に似た小輪花をつける。

猪口咲、よく整った濃赤色の花弁、純白色の雄しべの筒、先細り芯の調和が実にすばらしい。笠山の椿探訪に来た人達の、先ず第一に眼にとまる花である。

二十数年前のことになるが、日本ツバキ協会の行事に参加して、横浜の「こどもの国」の椿の森の見学に行った。椿の森の休憩所の側に、椿の切り花がたくさん展示しており、その中に島根半島の先細り芯のヤブ椿が花瓶にさしてあった。ツバキ協会の会員の方々が、この花を激賞されていたことを覚えている。いま笠山の椿林の中で、あのとときの島根半島の椿と同じタイプの花を探すことは、さして困難なことではない。

五 神社・仏閣と椿

萩の古い寺院には、椿の巨木が多い。

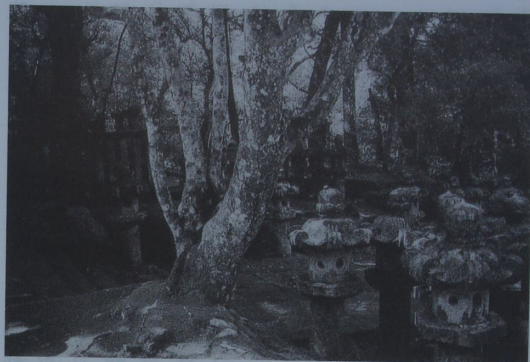
椎原地区の東光寺は、山号を護国山といい、黄檗宗に深く帰依した三代藩主・毛利吉就が、元禄四年（一六九一）に萩出身の慧極道明禪師を迎えて創建した寺で、大照院とともに毛利家の菩提寺であり、吉就をはじめとして五藩主夫妻及び一族の墓がある。江戸中期の最盛期には堂塔二十棟、僧侶八十人の大寺院であったが、いまは総門、三門、大雄宝殿、大方丈、



椿八幡宮の白椿 早春から開花する

かとの説もあるが、年代が少し違うようにも思われる。この椿は「宮さま椿」とも呼ばれている。この花と同じ種類の椿が、古い武家屋敷の庭などに見られ、それらの椿の中には東光寺の紅唐子と同じような大きな樹も見られることから、同じ種類の椿が当時の武家屋敷や寺院に植えられていたのではあるまいか。いずれにしても紅唐子は、萩のたくさんの椿の古木の中では、優品の部類に入る樹である。

さて、東光寺の総門から東側に見える山麓に、中ノ倉地区の明光寺がある。この寺は「浄土真宗本願寺派、山号東源山、寛永七年建立、明治十三年松本村梶ヶ原元泰法院跡を買取り再建したものが現在の堂宇是也」と寺の記録にある。この寺の門の脇に、樹齢約二百年の園芸種「秋の山」があったが、惜しいことに先年枯れてしまった。



宮さま椿と呼ばれる「紅唐子」(東光寺)

鐘楼などが残っている。これらの建築物は国指定の文化財になっている由緒ある寺である。

この寺の墓地に一本の紅唐子の椿がある。幹の根元につき木をした跡が見られ、根廻り百七十センチの大木である。

椿は生長が遅く、切り倒された椿の年輪を測ってみると、一年間に約一ミリ程度の生長をしていることがわかる。この割合で計算すると樹齢約二百七十年位になる。いまから二百数十年前ということになると、この椿が植えられた時期は正徳、元文年間になるのではあるまいか。この年代だと東光寺の創建四、五十年後に植えられたことになる。

毛利家九代藩主・斉房の夫人は京都有栖川家の出身なので、その関係で「日光」と呼ばれているこの京椿「紅唐子」が、萩に移されたのではない

六 唐椿キャブテン・ローの由来

大照院に近い青海地区の農家の庭先に、一本の唐椿の古木がある。毎年三月の終りから四

たくさん見られ、その落花の中から枝がわりで生じた淡紅色白覆輪しろふくりんの可憐な花を探し出すことができた。

松本の明安寺みやんじに椿の生垣がある。生垣といっても境界の垣で、刈り込みなどしない放任されたままの垣である。百数十年を経たヤブ椿や園芸種に似た白椿の大木が、墓地と隣接する椿東小学校との境にぼっんぼっんと聳えている。

この椿垣の中の白椿は秋から花が咲き、淡いピンク、白などの一重の花が見られる。「初嵐」のような花だが、多少葉が波曲する。

藩公の菩提寺・霊椿山大照院にも、京都から移されたという「袖隠そでかくし」の巨木があったが数年前切り倒されて、今は見る事ができない。大照院の付近には、百年を越す園芸種が多い。また土原地区の弘法寺こうぼうじの散り椿、上野地区の荒神社こうしんじの根廻り百六十センチのヤブ椿、三見地区の善照寺ぜんしょうじの古木などがある。



枝がわりで出現した 白覆輪花「指月山」

この寺に入る小径にはよく手入れされた椿垣があり、花の時期には見事な眺めである。

青海にある椿八幡宮は、鎌倉時代に長門守護職になった佐々木四郎高綱が、阿武郡の惣社として鶴ヶ岡八幡宮の分霊を勧請したもので、この境内に白椿があり、春になると形のよい花を樹一面につける。

萩城内にある志都岐神社は指月山麓にあり、神社の西側の山中にはサザンカの群生が見られ、その自生北限地になっている。毛利氏は指月山に築城し、三百年にわたる藩政時代、この山の樹木は城内林として保護され、そのまま今日にいたっている。このため全山原生林の様相を呈し、常緑広葉樹の巨木がいたるところに聳え、椿の季節には遙か高い梢に花は咲き、一つ一つの花を手にとって眺めることはできない。登山道には椿の落花が

ち帰った船長ローの名前をそのまま椿の名称として、キャブテン・ロー・カメラアと呼ばれた。そしてイギリスでつけられた名称はそのまま、現在の日本でもこの唐椿の名称として使用されている。

このキャブテン・ローと同じ種類の唐椿は、江戸時代に既に日本に舶来している。現在残っているところでは、薩摩の島津公から献木されたという兵庫県川西市の多田神社の唐椿の大樹や、愛媛県小松市、福岡県宝満寺山などに、この唐椿の古木があるという。

青海の唐椿キャブテン・ローについては、千八百年代に、金谷の高洲家に持ち帰られたものといわれている。

幕末、徳川幕府は外国船の来襲に備えるため、いまままで禁止していた大船の建造を各藩に許し、長州藩に対しても「海上防上の必要」と言う理由で、



唐椿 幕末に植えられたと伝えられる



唐椿キャブテン・ロー

半八重の濃赤色の唐椿、江戸時代からの大木は数少ない

月にかけて、目にしみるような濃赤色の半八重咲の巨大な花が、木を覆いつくすように咲く。ヤブ椿と違うこの花は、萩では珍しい唐椿のキャブテン・ローといわれている。

もともと唐椿は、中国雲南省昆明を中心にして自生している中国特産の椿で、日本のヤブ椿とは形質的に異種の椿である。

この椿は、いつのころから園芸種として中国で栽培されていたのかは明らかでない。しかし、明時代には既に多くの文人墨客が、この花を珍重していたことが記録に残っているので、明時代以前から栽培されていたと思われる。

さて、キャブテン・ローの名称の起こりは、一八二一年東インド会社の船長リチャード・ローが、この珍しい唐椿をイギリスに持ち帰ったことから始まる。この唐椿は中国名がないまま、椿を持つ

大船の建造を命じてきた。

そこで長州藩は、萩の小畑造船所でスクネール型大船「丙辰丸」を安政三年（一八五六）に、次いで「庚申丸」を万延元年（一八六〇）に建造した。これによって遠洋を航海できる長州海軍が誕生した。

さて、高洲家の当主は、これらの長州藩の軍艦に乗船していたと伝えられるから、しばしば長崎にも往来し、外国の文化にも接し、中国のこの珍しい唐椿を手に入れる機会もあったのではないだろうか。日本の寒さには弱い唐椿ではあったが、とにかく二本の唐椿が無事に萩で育ち、一本は金谷の高洲家に、一本は青海の平田氏の家屋の庭先に植えられた。これは今から百数十年前のことである。

高洲家に植えられた唐椿は次第に大きく育ち、年々華麗な花をつけていたが、その後移植したため、惜しいことに枯死したという。平田氏は青海の人で、高洲家の雑用などをするためしばしば備われて、所謂高洲家に「お出入り」する間柄であったという。平田氏は後に有田姓を名のり、現在の青海に土地家屋を所有していた。この土地は後に桂氏の所有となり、現在に至っている。

さて、高洲氏は藩公の菩提寺大照院の和尚に師事し、書道を習っていたが、金谷の自宅から大照院までの往復の途中、常に有田家（平田）に立寄って休憩していたと伝えられる。

このような関係で、高洲氏の持ち帰った唐椿の一本は有田氏（平田）の手に渡り、青海の住宅の庭先に植えられたもので、これが現在の青海の唐椿である。

この話は伝聞によったもので、多分に推測の域を脱しないが、確たる記録もない今、調査する方法もなく、真偽の程は不明である。

ただ現在確信をもって言えることは、唐椿キャプテン・ローが船長リチャード・ローによってイギリスに初めて伝えられた一八二一年とあまり変わらない幕末に、ここ日本国長州の萩に、珍しい唐椿が植えられていたという事実は、日本の椿の歴史の上でも注目に値するものである。

七 薩長同盟記念の木 キャプテン・ロー

平成七年（一九九五）二月、萩市が第五回全国椿サミットの会場を引き受けた際、「萩の椿」について話すことになった。そこで、高洲氏が当時としては入手困難であった唐椿をどこで手に入れ、萩に持ちかえったか、古い記録を調べることにした。

高洲氏は長州藩の軍艦に乗っていた際に持ち帰ったと伝えられることから、長州藩の軍艦

軍艦セミラミス号、タンクレード号が報復攻撃、陸戦隊が上陸して砲台を占領し、破壊して引き上げた。

京都の朝廷では、今まで勢力をもっていた尊攘派の公卿が、八月十八日公武合体派のクーデターで失脚し、三条実美ら七名の公卿は都落ちして長州に落ち延びた。また、朝廷は長州藩担当の堺町御門の警備を免じ、藩主毛利敬親、元徳親子の入京を禁止した。この政変により長州藩は中央の政界に勢力を失った。

元治元年（一八六四）朝廷に嘆願のため、長州藩は世子毛利元徳の上洛を決定。三人の家老が兵を率いて先発。藩主の雪冤（無実の罪をすすぎ、潔白であることを明らかにする）を嘆願したが拒否された。そこで七月十八日長州藩は洛中に向かつて進軍、御所の蛤御門に至り、守備の会津藩兵

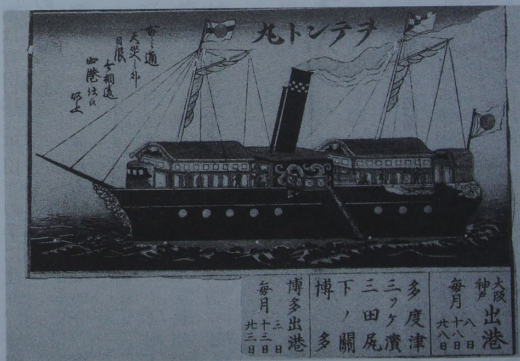


キャプテン・ローの花

が長州藩外の諸国に航海した記録を調べればよいと考えた。

幕末の数年長州藩の置かれていた状況は内憂外患こもこも至るといった有様で、椿を栽培して花を眺めて楽しむというような心にゆとりのある時代ではなかったように思われる。

文久三年（一八六三）長州藩では尊皇攘夷派が政権を握り、外国船打ち払いを実行した。すなわち、五月十日下関海峡を通過するアメリカ商船ベンプローク号を砲撃、次いで二十三日フランス通報艦を砲撃、二十六日オランダ軍艦砲撃など、全国にさきがけて攘夷決行の火ぶたを切った。六月一日アメリカ軍艦ワイオミング号の報復攻撃を受けて下関亀山砲台は壊滅し、四隻あつた藩の軍艦・庚申丸、壬戌丸は撃沈され、癸亥丸は大破。長州藩は甚大な被害を受けた。六月五日フランス



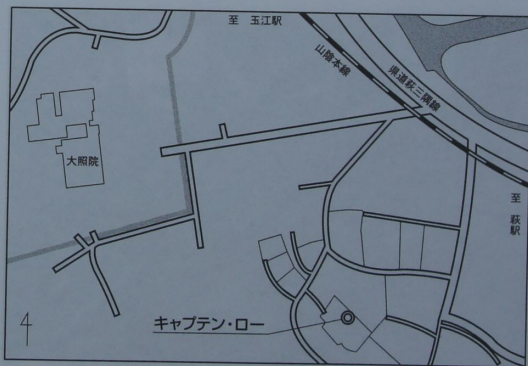
長州藩の軍艦内寅丸 別名をヲテント丸という（萩市郷土博物館蔵）

及び応援の薩摩藩兵、桑名藩兵と激戦の末、敗退した。

このことで幕府は七月二十三日長州藩追討の勅令を請い、八月一日西南二十一藩に勅令を伝えて出兵を命じた。これが第一次長州征伐である。

長州藩にとって更に悪いことには、英・仏・米・蘭の四ヶ国連合艦隊が前年の砲撃に対する報復攻撃のため来襲したことである。連合艦隊の兵力は、軍艦十七隻、大砲二百八十八門、兵員五千で八月五日、六日、七日にわたり下関を砲撃、八日に至って長州藩は降伏、十四日停戦協定が結ばれた。

これらのことから藩政府の政策を担当していた尊攘派の人々は政権の座を追われ、幕府に謝罪降伏することにより、藩の保全を図ろうとする恭順派の人々が政権を握った。



青海のキャプテン・ローの位置 (萩市大字椿字青海)

十月二十一日恭順派の政府員は恭順の徹底をはかるため奇兵隊などの諸隊の解散、尊攘派の人々を投獄。十一月十一日、十二日京都出兵の責任者三人の家老を切腹させ、十二月には十一名の政務員を投獄。全員を斬罪にした。

十二月二十七日、長州藩謝罪降伏の名目が立ったとして幕府軍は撤兵令を発し、翌慶応元年(一八六五)一月四日総督徳川慶勝も広島よしかの營を撤して、大坂に向かった。

恭順派からの処罰を察知して九州に逃亡していた高杉晋作は、三人の家老が切腹させられたことを聞き、急ぎ下関に帰って拳兵、長府に屯集していた諸隊もこれに加わり、萩に向かつて進軍。恭順派の政府員は諸隊の追討を決定した。

慶応元年(一八六五)一月、諸隊との戦闘で藩の正規軍は大敗して退却した。この結果、恭順派の政府員は退役させられ、長州藩は外に対しては恭順を趣旨とするも、内に於いては軍備の充実を図る方針をたて、軍備の拡充に努めた。

慶応元年四月十二日幕府は再び長州征伐(第二次)の命令を出した。

翌慶応二年(一八六六)一月二十一日、坂本竜馬を介して京都の小松帯刀おとまつたけの邸で木戸孝允は西郷隆盛と会談し、薩摩・長州連合の約束を協定した。

一月二十二日幕府は封地十萬石削減など毛利氏処分案を朝廷に奏上し、翌日勅許を得た。

六月七日幕府軍は長州藩領大島郡を急襲占領、四境戦争が開始された。六月十四日芸州口

(広島)、十六日石州口(島根)、十七日小倉口(福岡)で幕府軍と戦闘開始。
 このような状況なので、元治元年、慶応元年、慶応二年九月までの間、藩の軍艦は長州藩以外の港に行くことはなかった。

戦闘は長州軍有利に展開し、九月十四日、幕府は征長諸藩に撤兵を命じた。

慶応二年十月二十日薩摩藩より薩長連合の修交使節として黒田嘉右衛門等が山口に到着。その時の記録によれば「藩公、黒田等を湯田の高田御殿に引見し、その使命をきき、酒饌を賜り、翌日又これを客館に延び、二汁五菜の盛饌を饗し、黒田、平川に各銀幣五枚、東郷に金幣二百匹を賜い、其餘随行者に物を賜う」。

薩藩の修交使節に対し、長州藩でも答使を出すことになり、正使木戸孝允、副使河北一、十一月十九日長州藩の軍艦丙寅丸に薩摩の使節黒田等も乗船させ、当時は幕府と戦時中なので、「船には薩摩旗を掲げ、途中長崎に寄港せしとき幕府の番船数艘来りて四方を囲みしも、薩旗を掲げ薩人乗れるを以って事なきを得たり。二十五日薩藩の旗章を徹し、長藩旗を翻して鹿児島湾に入る。陸上にては之を見て二十一発の祝砲を放ち、紫幔を廻らせる舟二艘を出し、先づ正使木戸を迎え、次に副使河北を迎う。木戸等其迎接の厚さに驚きしと言う」と記録にある。「歓迎頗る尽せり」とも書いてあるので大いに歓迎されたことがわかる。十二月十四日丙寅丸、無事馬関(下関)に帰着。

幕末数年間の事件と軍艦の動きを調べると、この鹿児島行きが唯一の藩外航海であり、このとき丙寅丸に乗船していた高洲氏が「薩摩紅」と呼ばれていた椿苗を鹿児島で入手して持ち帰ったものと想像される。このように考えると高洲氏にとって、この二本の唐椿は「薩・長連合の記念の椿」であったということができよう。

(参考文献 萩市史、防長回天史)

八 狐島の侘助椿「ヒメアカリ」

萩の椿展にこの珍しい侘助椿がはじめて出品されたのは、昭和五十七年(一九八二)のことである。

この侘助椿については、この椿を発見した岡清熊氏が、日本ツバキ協会誌「椿」二十二号に次のような記事を発表している。

「ヤブ椿の中で、花のいいものはないかと、花どきの山を歩くのを楽しみにしているが、昭和五十六年(一九八一)の萩市の椿展が終わって三日目の三月十八日、私の

しべをもっている、いわゆる銀しべである。花つきは非常によく、枝によっては鈴なり状に着蕾している。

以上のような珍花であったが、その後今まで、あまりきちんと見ていなかった。「日本」の本を丁寧に読んで行くうちに、私の見つけた珍花と酷似しているものに「子侘助」や「天倫寺月光」があり、前者はヤブ椿の自然実生の変異と思われ、後者は芽状変異で出来た品種と、書いてあることがわかった。しかし、ここで私が不思議に思ったのは中京や出雲、萩、その他、非常に遠く離れているところに現れた突然変異の花が、どうして全く同じ形体をしているのかということである。

全く異なった個体の、しかも遠隔の地に変異を起こさなければならぬ何かを、ヤブ椿はもっているのであろうか。不思議に思われる。そしてまた、この不思議にはもうひとつの不思議がくっついていることである。それは会誌「椿」の十九号三十九頁に、松江の井原氏が書いておられる「黄泉の銀花の二股葉について」という一文である。私の発見した変異花も、変異した枝のみに限って、この二股葉が井原氏の書いておられる三様の形で、発生しているのである。(注・井原氏の三つの型、①葉身の中央脈が葉先の方に半分ほど上がった処より分岐し、葉先が僅かに分かれている。②中央脈は葉柄より少し上がった処で分岐し、葉先ははつきり分かれ尖っている。分かれた



侘助椿「ヒメアカリ(姫灯)」

その日は、午後一時から半島のつけ根からたくさんヤブ椿を一本一本丁寧に、花の様子を観察して行つて、やや疲れた時であった。最初に目についたのは、垂れ下がった弱い枝の一部に、前記の小花を二つ見つけたのであるが、次にその樹に登ってみて、明らかに突然変異の花で、その枝が大小沢山あることに気づいた。その後の調べで、変わり枝は合計二十八本あって、突然変異の花の形状は、花径は小花で二・五センチ、大花で三・五センチの猪口咲き、花色は濃紅色、雄しべは侘助のように、不完全で不揃いではなく、きちんと揃っていて、唯黄色い花粉がついていないだけの完全な形の

住んでいる郊外の入り江の沖に突き出している小さな半島の先端で、波打ち際の上に生えている樹齢百年ぐらいたら思われる地際の幹回り六十八センチ、六十四センチ、高さ七メートル余りの双幹の樹上に小さな銀しべの侘助風の小花を見つけた、この時の喜びと驚きは、言いようのないものであった。

その日は、午後一時から半島のつけ根からたくさんヤブ椿を一本一本丁寧に、花

の様子を観察して行つて、やや疲れた時であつた。最初に目についたのは、垂れ下がった弱い

枝の一部に、前記の小花を二つ見つけたのであるが、次にその樹に登ってみて、明らかに

突然変異の花で、その枝が大小沢山あることに

気づいた。その後の調べで、変わり枝は合計二

十八本あって、突然変異の花の形状は、花径は

小花で二・五センチ、大花で三・五センチの猪

口咲き、花色は濃紅色、雄しべは侘助のように、

不完全で不揃いではなく、きちんと揃っていて、

唯黄色い花粉がついていないだけの完全な形の

それは、先に発見した椿（仮にA地点）から直線で千二百メートル離れた山の手の麓で、今度は切り株に発生した胴吹き芽に、A地点の変異花と同じ方の変異花が、今年（昭和五十七年）の三月に十花ほど咲いたことである。（胴吹き芽は、十本ばかりの二年枝）この原木は、私の山に入る入り口（B地点）の所にある、ごく普通のヤブ椿であり、今度の場合は樹上での変異でなく、根本十センチばかりの所で、三本の株立（各径十センチばかり）の中の二本が伐り倒され、その切り枝に咲いたのである。これは明らかに、伐切されたショックによる突然変異であると思う。このことは私に大変興味を持たせた。

ところが不思議はまた起こった。昭和五十六年秋、A地点から千六百メートル、B地点から千メートルの三角点（C地点）の山麓の、私の山畑のわきにあった、白の自生ヤブ椿で、私が大切にしていたものであったが、幹回り二十八センチほどのその木を隣の山の立木を買った人が、伐採する時に、境界を越えて私の白椿を伐り倒してしまったのである。ずいぶん腹が立ったのであるが、仕方なくあきらめていた。ところが今年の夏すぎ、何気なくこの伐り株を見たところ、十数本の胴吹き芽が出ていて、長いものは二十センチにもなっており、よく見るとその中の二本の芽に一葉づつ、かの二股葉が出ていて大変驚かされた。これも明らかに、ショックによる突然変異である

部分は少し重なっている。◎中央線は葉柄のつけ根から分かれ、あたかも二枚の葉をずらして重ねたようである。）そしてこの二股葉について、井原氏は言及しておられないが、この二股葉には葉腋に二つの芽を持っている。これは井原氏の写真にもはっきり写っているが、このことについては井原氏は気づいておられないのではないか。これは「天倫寺月光」にも現れていると思われる。私はこの二股葉は上下二枚の葉が異常接近して、くっついた現象ではないかと思っている。そしてこの異変の枝は、二股葉を持っていない芽を接木や挿し木しても二股葉が出てくることを、私は実験で知った。そうこうしているうちに、今度は椿の方から私に珍現象を見せてくれた。



ヒメアカリの二股葉

ことに違いがないからである。そしてこのことは、A地点での珍花と同じように、この白椿の株からも立派な珍花が生まれるだろうと頗る興味深く思っている今日この頃である。二股葉が出たことは突然変異の珍花の現れる可能性を秘めている。二股葉と猪口咲き、伐採とシヨック咲き。丸一年の間に私のまわりで起こった珍現象、いろいろの可能性を秘めて、昭和五十七年は暮れる。昭和五十八年の椿展は、三月十一日より十四日まで、萩市民館ロビーで開かれる。」

岡清熊氏が発見した侘助椿ヒメアカリは、平成七年、「萩市保存樹木」に指定された。この椿の穂木を取って、接木してみると、侘助タイプの小さい花に混じって、元の母樹のヤブ椿の大きい花も咲く。全部の花が侘助タイプにならないことがあるのが惜しまれる。

さて、侘助椿の名称の起こりはいろいろな説がある。
昔、堺の町人、笠原宗全（侘助）の愛した椿なので侘助椿といったという説や、侘数寄から転化した名称であるともいわれている。

また、千利休の下僕に侘助という者がいて、花木を植えて楽しんでいたが、その中に見えない珍しい椿があった。これが利休の目にとまり、花の気品が優れていたので、茶花として用い、下僕の名をとって侘助と名づけたという。

このような話から考えると侘助椿という名称は古く、安土桃山時代から既にあつた椿の名称ということになる。

侘助椿と呼ばれる椿は、一般に次の条件を持っている。

一重で小輪、猪口咲き。芯が退化変化。芯が退化しているので種子がつきににくい。一般に早咲き。

このような椿には二つのタイプがある。第一のタイプは、古くから知られている有楽や胡蝶佐助などの園芸種の椿である。この中で有楽は僅かに種子をつける能力があり、この種子を蒔くと、その実生の椿の三分の一位に蒔の退化した侘助タイプの花が咲くといわれている。

次に侘助の第二のタイプとして普通の花を咲かせていた椿が、幹を切断されるなど何らかの原因で、その胴吹き芽から突然侘助型の花が現れるものである。

このタイプの椿は昭和四十年（一九六五）前後から、全国の椿愛好家が増えて、それぞれの地域の珍しい花を紹介し合うようになって広まった。現在園芸種として椿販売カタログなどにも載っている一子侘助が、昭和四十一年（一九六六）ヤブ椿の枝変わりとして報告されたのははじめ、昭和五十八年（一九八三）ごろまでに黄泉の銀花、天倫寺月光、伊予侘助など多くの侘助タイプの椿が発表されている。

萩市狐島の侘助椿ヒメアカリも、この仲間に入る椿である。

（参考文献 一九八三年「椿」二十二号「椿と侘助」）

で年々花を咲かせていたが、椿瀬の地名の起りになった大椿の姿は消え失せていた。文化財に指定されている椿の大木の一群は、胸の高さで測った幹の周囲二メートルの赤の散り椿、樹齢二百年を越える白八重椿、またこの樹と同じ時代に植えられた赤一重、筒芯の椿などのほか、樹齢百数十年の赤の散り椿、白八重椿など数本の園芸種の椿がある。

今から四百年も前の江戸時代の初期、園芸種の椿も現在ほど多くなく、入手することも困難と思われる時代に、どのような人がこの草深い田舎の山すそに、珍しい赤の散り椿を植えたのであろうか。またそれから二百年も経った時代に、白八重椿や赤一重椿を植えた人は、武士であったろうか、それとも豪商であったろうか。何ら記録も言い伝えもない今、一切は不明である。

この椿林の花は園芸種ではあるが、優れたものとはいえない。過去ここを訪れた椿の研究家達は、散り椿や白八重椿によい評価を与えていない。赤筒芯椿に至っては、問題にもしていない。ところが赤筒芯椿の太い枝（直径二十センチ）が枝変りをして、桃色地白覆輪の花をつけている。単純な赤筒芯の椿から、このような見事な覆輪花が突然出現することを見るにつけ、椿は本当に不思議な植物であることを痛感する。



椿瀬の散り椿 花卉が一枚一枚離れて散る

九 椿瀬の散り椿

椿東の目代地区から阿武川治いに一キロメートルばかりさかのぼると、川上村文化財指定の樹齢四百年の散り椿のある椿瀬に着く。

椿瀬の名称については、弘化二年（一八四五）の防長風土注進案に次の記事がある。

椿瀬、家拾九軒。但太古椿山頂に大椿木御座候由（事実普く世人の知る所也）其花東方の枝より咲始め候故、其景暮此里の水面に移る。世人未だ花を見ずと云うとも、此所里人目前に見る故に里名を椿瀬と唱候由、古老申伝候事。

文化財指定の散り椿は、弘化年間には既に大木



三段花 樹齢200年の古木

か山口県内にも他に類例を見ない貴重なサザンカである。樹齢約二百年、以前は屋敷の門のそばに植えられていたが、現在では家屋が取り除かれ、畑の一隅にこれを見ることができている。花時にここを訪れると、三段花の名称通りに「段咲き（やぐら咲き）」になったもの、また段咲きにならない普通の花など樹下の落花の中に見ることができ、またこぼれ種から芽生えた幼苗も所々に見られる。

「三段花」については、江戸染井村の伊藤伊兵衛が元禄八年（一六九五）に著した「花壇地錦抄」に記述がある。

花壇地錦抄はわが国で最も古い園芸書で、園芸植物全般にわたり解説しており、この書物の巻之二に「山茶花のるひ」（サザンカの類）として五十種のサザンカ名があげられ、その中に「三段花」がとりあげられている。五十種のサザンカには、それぞれ簡単な解説がつく。

「三段花
くれない中りんつばきのごとく、花の中よりし
べ出、三段にさく。」

十萩のサザンカ

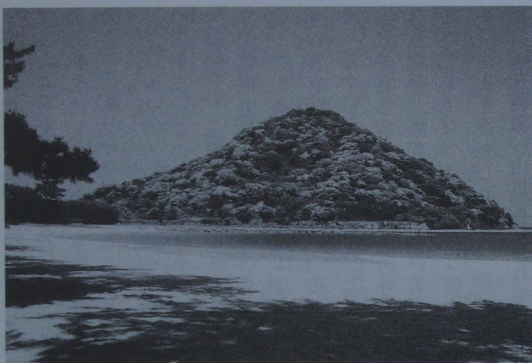
(1) 元禄時代の園芸種 三段花

平成十五年（二〇〇三）、萩市を会場に開催された椿サミット全国大会に来場された椿愛好家達が、こぞって見学を希望したもののひとつに、桜江のサザンカの古木「三段花」があったと聞いている。この樹は、樹高五メートル、根元周囲一メートル、萩市指定保存樹木。長州藩時代に武家屋敷に植えられたものである。

三段花はサザンカの中でも珍品といわれる品種で、濃紅色ときに白星絞りになる二段咲き（やぐら咲き）小輪のハルサザンカである。このような「三段花」の大木は、萩市内はおろ



三段花の花
段咲きになり、しべの中に花卉が出る



指月山全景 海中にあった島が砂洲でつながる

面積は約十九ヘクタールである。もと海中にあった島が砂洲で陸につながったもので、慶長九年（一六〇四）、毛利氏によって築城が始められ、山頂に詰丸が設けられていた。

山は常緑広葉樹林に覆われ、現在は国の天然記念物に指定されている。築城当時から現在まで登山路以外は、山林の植生にはほとんど手を加えていないと思われる。

昭和四十七年（一九七二）に発刊された山口県植物誌には、「指月山は全山スタジイを主とする暖帯を代表する常緑広葉樹林で、この林中にサザンカが散生する。花は白色、単弁で、野生状態をなす。本来の野生か栽培品の逸出か断定できないが、通常栽培品が野生化することはないので、本来のものを見てよいのではあるまいか。そうすると指月山は分布の北限となる（後略）」。

ながい歳月の間に、当時の園芸種はしだいに姿を消し、ただ三段花のみが現在まで残っている。

段咲き（やぐら咲き）の花は、椿ではいくつも見られるが、サザンカでは極めて珍しく、多くの園芸種の中でこの三段花がただ一つといわれている。

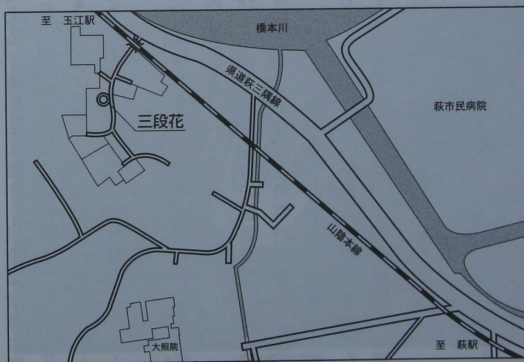
(2) サザンカの自生北限地

指月山

サザンカの自生地は沖縄の西表島を南限とし、萩市指月山を北限とする説がある。

今までは佐賀県の背振山系がサザンカの自生北限地といわれていた。サザンカが九州に自生していることは、江戸時代からその記録が残されていて、以前から知られていた。

指月山は萩市街地の西北端に位置し、花崗岩からなる円錐形の山で、標高百四十三・七メートル、



三段花の位置（萩市大字椿字桜江）

昭和六十二年（一九八七）に発行の「萩市史」には、「山麓に近い林内にはサザンカの群生するところがあるが、花は白色、単弁で野生型である。これがその下の公園の植栽樹からの二次的野生化であるか、本来の野生かどうかは、椿八幡宮の社叢（むすぶ）のものと断定したい」。

指月山のサザンカの自生地は、志都岐神社の西側の山中で、この場所には小径があり昔の土堀の跡が一部残り、土堀の内側に二〜三メートル位のサザンカが散生する。スタジイ、タブノキ、オガタマノキなどの大木が太い枝を伸ばし、その陰に育つサザンカの育成状態はよくない。花のつき方も極めて少なく、僅かに白い花が見られる程度である。

花で見る限りは、野生のサザンカの特徴を備え、白色単弁、園芸種ではないように思われる。指月公園の平地に育つサザンカは樹も大きく、花の数も多い。全山を調査した結果、サザンカが見られる場所は、神社西側の山麓に限られている。



野生サザンカ 白色 単弁

あとがき

「萩の椿」（萩市郷土博物館・友の会発行）を最初に執筆したのは昭和五十九年のことで、それから二年の歳月が過ぎ去った。

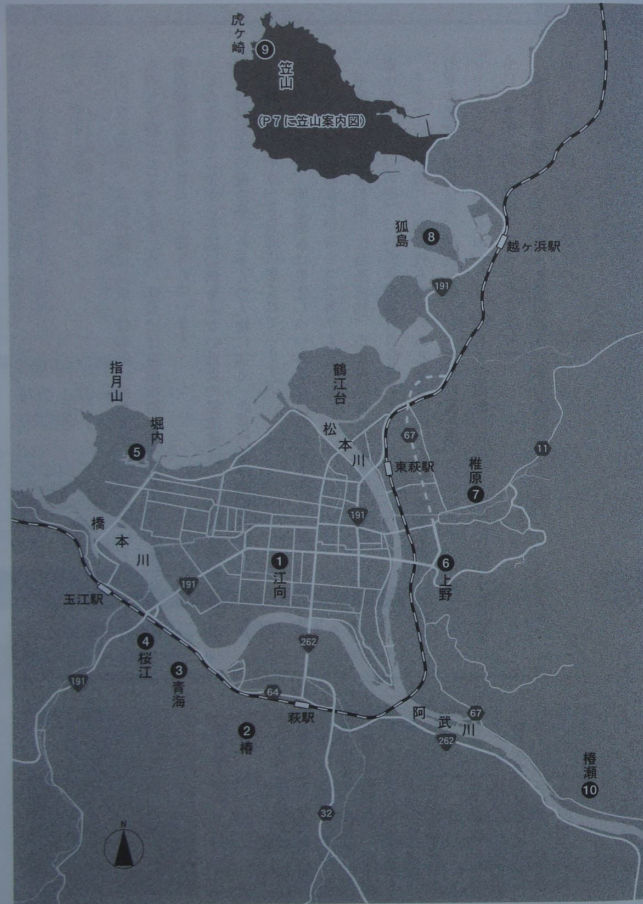
その当時は笠山の椿林が開発されて十数年後のことで、花どきに虎ヶ崎椿群生林を訪れる人も次第にその数を増してきて、この人達の中には笠山の椿について、何か書いたものはないかと尋ねる人も随分あった。ヤブ椿のことだから名称もないし、また個々の椿の記録もない。

しかし、数年来萩市の椿部会の役員として椿展に出品する切り花を探し歩いたり、笠山の椿林の案内などしてきたので、今まで取り扱った椿のことや先輩からの話など、思いつくままに書きとめた。私は、笠山の花の見頃の時期に椿林の説明をする「椿見どころ案内人」の仕事の数年間続けてきた。そこで分かったのは、訪れる人に幾つかのタイプがあることだ。椿の花と周囲の景色を楽しむ人、一つ一つの花を仔細に眺める人、椿林の特殊な椿を目当てに来る人など、さまざまである。これらの人々を念頭において本書を執筆した。

この度シリーズ「萩ものがたり」として、新たに萩と椿、笠山、笠山の歴史、薩長同盟記念の木、サザンカの項目を加えたり、探訪に役立つように所在を示す地図なども入れ編集した。なお、この文を書くについて、萩市椿部会の方々のご協力を厚く感謝するものである。

平成十六年三月

吉松 茂



萩の椿・名所めぐり

番号	地区	場所・名称	摘要	ページ
1	江向	萩市民館・樹齢200年のヤブ椿		
2	椿	椿八幡宮 ・白椿 ・社叢(カシ、イチヨウ)	萩市指定保存樹木	31
3	青海	桂家・唐椿キャプテン・ロー	萩市指定保存樹木	33
4	桜江	藤田家・サザンカ(三段花)	萩市指定保存樹木	52
5	堀内	志都岐神社 ・指月山 ・サザンカ、椿	国指定天然記念物	32
6	上野	荒神社・社叢(椿)	萩市指定保存樹木	33
7	椎原	東光寺 ・建造物 ・宮さま椿	国指定重要文化財	30
8	狐島	旧萩女子短期大学・椿(ヒメアカリ)	萩市指定保存樹木	43
9	笠山	明神池・コウライタチバナ 虎ヶ崎・タチバナ、コウライタチバナ ・椿群生林	国指定天然記念物 萩市指定天然記念物 萩市指定天然記念物	14) 29
10	川上村	椿瀬・椿林	川上村指定文化財	50

(※社叢=神社の森)

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

シリーズ「萩ものがたり」②のご案内

高杉晋作

100問100答

一坂太郎



萩に生まれ、幕末の動乱を風のように駆け抜けた快男児。不屈の信念を貫き、時代の扉を押し開けた二十七年八月の短い生涯。現代の日本に最も求められている男・高杉晋作の魅力、Q&A形式でたどる。どこから読んでも楽しい晋作伝。

A5版62頁 定価500円(税込)
お申し込みは直接、下記「萩ものがたり」まで

第2回(10月)発行予定

萩まちじゅう博物館 西山徳明(九州大学教授)

萩開府 北村知紀(郷土史家)

※出版予定タイトル(変更になることがあります)

- 吉田松陰 ○英国密航留学生・長州ファイブ ○品川弥
- 松下村塾の人々 ○高島北海(画家) ○幕末の科学者
- 大阪の中の萩 ○萩偉人伝 ○萩見聞・萩語録 ○松陰
- 萩焼 ○萩の年中行事 ○萩沖の島々 ○萩の伝統産業
- 巨樹・古木探訪 ○萩沖の魚たち ○萩の天然記念物

萩ものがたりは、定期購読

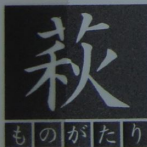
年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・

* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料!

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、

電話・インターネットでの申込みも

会費のお支払い方法 申込みと同時に郵便振替用紙をお届
銀行からの口座引き落としでもできま



有限責任
中間法人 萩ものがたり

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/story/index.html

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

着丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えます。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新胎動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など、宝物々ともいふべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるように、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(二〇〇四)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるようお願い申し上げます。



《著者紹介》

吉松 茂

大正五年、萩市生まれ。山口県師範学校卒。萩市、豊浦郡阿武郡の公立学校に勤務。退職後、総務庁行政相談委員、萩市郷土博物館嘱託、同委員会委員、萩市文化財審議委員を歴任。勲五等瑞宝章を受章。現在萩園芸友の会稽部会長。

著書に「笠山椿群生林ガイド」笠山の植物「改訂山口県北部地方植物目録」「幻の桜ミドリヨシ」。「萩の花ごよみ」「平安古の史跡」他がある。

定価 600円 (本体571円+消費税29円)

笠山は萩市の北方にあつて、日本海に突出した小火山。笠山の北端・虎ヶ崎には約二万五千本のヤブ椿の群生林がある。
笠山の椿や市内周辺の椿の生態や由来を紹介し、椿のカラー写真と椿群生林のガイドマップも収録した群生林散策のお供に格好の一冊。



27

萩

Vol. ①
萩の椿

2004年4月1日 第1刷発行

著者 吉松 茂

発行者 野村典児

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

印刷 有限会社マシヤマ印刷

ものがたり

萩市立図書館



110447869